中国西北部におけるムスリム社会の家族と女性

―甘粛省臨夏市のある回族家庭の事例―

金　　仙玉 *

Families and Women of Muslim Societies in Northwestern China:

Case Study of a Hui Family in Linxia City, Gansu, China

JIN Xianyu

Abstract

This study aims to paint a picture of women in Muslim society in northwestern China, and also elucidate the way of thinking behind their family lifestyle. The S family, belonging to the Hui people (a Chinese ethnic group), from Linxia city, Gansu, was chosen for the case study, which describes the family's structure and daily life.

The S-family is an extended family with two married couples of three generations living under one roof. Both husbands are out of the house most of the time attending to business, buying daily necessities, visiting people, or, on Friday, attending group worship. In contrast, the wives rarely go out; their lives are centered on the home doing housework and taking care of the children.

As to the lifestyle of females, S's wife and the wife of the eldest son abide by Islamic rules, but the third daughter has a mixed lifestyle incorporating Islamic regulations and mainstream culture. However, the daughter appears to be caught between multiple identities. Although she has a yearning for the Han Chinese lifestyle, she also is aware of her Islamic identity. She is dissatisfied not only with the regulations on Islamic dress and separation of the sexes, but also the restricted role of women in the family. She has studied hard since she was a young child and is currently preparing for the graduate school entrance exam. The desire to leave Linxia city and change her life is the daughter's main motivation for wanting to further her studies.

On the other hand, S's wife and the wife of the eldest son remain at home, doing housework and taking care of children, and are therefore isolated from the outside world. They follow their husbands' instructions on everything. S's wife, as a grandmother, has a high status in relation to her daughter-in-law, but even she cannot change her submissive relationship to her husband. She makes no attempt to change her current life. However, the wife of the eldest son is dissatisfied with her lot and wants to make a change.

1. はじめに

1980 年代以降，中国政府の積極的な宗教政策によって回族[1] 社会では，イスラーム復興

* 名古屋大学大学院国際開発研究科博士課程後期課程

運動が起こった．全国各地の回族社会において，清真寺（モスク）や拱北（教祖や教主の墓を囲んだ参詣修行施設）など宗教的建築を復興再建し，それらの宗教施設で勤務するアホン（宗教指導者・教長）の養成も積極的に実施し，メッカへの巡礼を行なう回族もますます増えている．回族女性の教育問題も注目されてきて，回族が集中して居住している寧夏，甘粛などでは様々な形の回族女子教育が行なわれている．

研究の面においても，回族出身の研究者が育ってきており，回族社会ではいわゆる「イスラーム文化ブーム」が現れている．1980 年代に入ってから，全国各地で中国イスラームや回族に関する学術会議が開かれ，その成果も公表されている．回族に関する雑誌として，『中国穆斯林（ムスリム）』が 1981 年より，『回族研究』と『中国回族研究』が 1991 年より創刊されるなど，目覚しい勢いで研究活動がなされている．

ところで，回族に関するこれまでの研究を顧みると，歴史学（中田 1971，片岡 1978，馬 1986，張 1993，張 1994，馬 2000，高 2002，韓 2003 等）や文化人類学（Gladney1991，Pang1992，劉 1994，虎 1997，高橋 2000，Gillette2000，澤井 2002，王 2003，西澤 2004，高橋 2005，陳＆楊 2005 等）の視点に立って回族全般について研究を行ったものは多く見られるが，ジェンダーとフェミニズムの視点から回族女性の問題について言及したものはあまり見られない．

従来の回族女性問題を扱った研究には，中原地域における女寺（女性モスク）を歴史学的視点から考察したもの（水 1996，Jaschok & Shui2000），北京市回族女性の儀礼活動（Gladney1998），西北地域における回族女性の民間学校教育（江 1995，江＆王 1996，松本 2001，楊 2002，王＆新免 2005，金 2006a，金 2006b 等）と，西北地域における回族女性の未就学問題（新保 1996，羅 2002 等）を人類学的視点から分析したものが見られるが，ジェンダーとフェミニズムの視点から回族女性の家庭生活のありかたについて論述したものは見当たらない．

回族社会における家族研究（馬＆虎＆張 2004）と経済収入，家計の管理，消費の決定権においての回族女性の地位に関する研究（秦 2004），少数民族の婚姻家庭についての研究（厳 1986）の中で，回族女性の家庭生活のありかたについて多少触れているが，その記述が不十分であるため，回族女性の家庭生活の背景にある意識様態を知るのは難しい．例えば，厳の「男が外向きを担当し，農業，工業，商業などを営み，家族の生計を掌握する．女は内向きを担当し，家事の切り盛りや子供の世話をする」（厳 1986：87）という記述と，馬＆虎＆張の「夫が大きな権威を持っており，一切の事柄を決めることに対し，妻は発言する権利がなく，黙々と家事ばかりしている」（馬＆虎＆張 2004：154）という記述から多くの回族女性は夫にリードされ，家庭内に閉じこめられる生活を送っていることがわかるが，このような生活について回族女性はどのような意識を抱いているのかについては不明である．国の基本政策として男女平等を掲げており，女性の社会進出が目立つ中国社会に生きている回族女性たちが男性に従属し，家庭内に閉じこめられる生活に不満が全くないとは思われない．

回族は中国に広く分布しているが，西北部の回族についてはこのような男性優位のあり方が依然として根強い．そこで，本稿はジェ

ンダーとフェミニズムの視点から中国西北地域の回族社会における一家族[2]の構成と家族関係を考察し，そこから回族女性の家庭生活のありかたとその背景にある意識様態を解明することを目的とし，従来こうした視点からの研究が十分でなかった回族女性研究を一歩進めたいと思う．具体的には，「中国のメッカ」と呼ばれる臨夏市のある回族家庭[3]を事例として，都市部に住んでいるムスリムの家族構成と家族関係を考察し，そこから女性の家庭生活のありかたと女性の社会進出についての回族女性の見方について分析を進めることとする．

本稿ではあくまで西北部の回族集住地の代表として臨夏市をとりあげ，一家族の典型事例から西北回族の実態について考察を加えるものであり，他地域で漢族と変わらないような生活をしている回族については言及しない．つまり中国全体の回族として一般化するつもりはないことを初めに断っておきたい．

2. 調査地の概要及び調査方法

2.1 調査地の概要

臨夏市は甘粛省臨夏回族自治州の州都で，臨夏回族自治州の中部，甘粛省の南部に位置している．ムスリムである回族が多く住んでおり，長い間「中国の小メッカ」と呼ばれてきた．臨夏州人民政府のホームページによれば（2008年6月30日閲覧），臨夏市の総面積は88.55km^{2}であり，総人口は19万3000人で，人口の約半分が回族である．

臨夏市には清真寺と拱北が多く，両者は合わせて126箇所ある（馬2001：4）．2003年，臨夏市のGDPは7.72億人民元で，一人当たりGDPは3938人民元である．同年，甘粛省の一人あたりGDPは5022人民元であり，全国平均一人当たりGDPは9101人民元である[4]．上述の比較から分かるように，中国の経済ランキングで甘粛省は低いレベルにあり，臨夏市は甘粛省の中でも経済的に遅れているところである．

2.2 調査方法

2005年11月4日～11月25日と2007年5月3日～5月18日の二回にわたって臨夏市で現地調査を行った[5]．第一回現地調査では，一般回族家庭S氏宅に4日間宿泊し，家族関係及び家庭生活における女性のありかたについて参与観察を行い，また2軒の回族家庭を訪問し，家族メンバーにインタビューを行なった．第二回現地調査でも，8軒の回族家庭を訪問し，家族メンバーにインタビュー調査を実施した．第一回現地調査では，臨夏市政府や臨夏市イスラーム協会が家庭での女性の役割や女性の社会進出に対してどのような方針を取っているかを調査するために，臨夏市民族宗教事務局のM局長，臨夏市イスラーム協会のZ主任にインタビューを行なった．

本稿では，第一回現地調査の際，4日間宿泊したことがあるS氏の一家の生活を取り上げ，考察することとする．S氏一家の家族間の関係と分析を明確にするため，S氏家族の事例をS氏一家，家族の形，夫婦関係，親子関係，姑と嫁の関係，兄弟関係，義理の兄弟関係の七つの部分に分けて記述する．S氏宅には第二回現地調査時にも訪問し，一年半ぶりに家族の一部のメンバーと再会することができた．第一回現地調査の時には，S氏の家族が全員そろっていたが，第二回現地調査の時には，S氏，長男，長男の妻，二番目の孫は青海省果洛蔵族自治州におり，家にはS氏

表 1　S 氏家族の基本状況

続柄	年齢	民族	学歴	職業	収入(1 年)	結婚状況	結婚した時の年齢
S 氏	61 歳	回族	未就学	虫草の商売	4000 元	既婚	25 歳
妻	54 歳	回族	未就学	専業主婦	0 元	既婚	18 歳
長男	32 歳	回族	中学校	虫草の商売	4000 元	既婚	25 歳
嫁	25 歳	回族	小学校	専業主婦	0 元	既婚	21 歳
孫（男）	3 歳	回族					
孫（男）	1 歳	回族					
長女	28 歳	回族	中学校	専業主婦	0 元	既婚	20 歳
婿	29 歳	回族	小学校	チベット服の商売	30000 元	既婚	21 歳
孫（男）	5 歳	回族					
次女	26 歳	回族	専門学校	小学校教師	5000 元	既婚	23 歳
婿	27 歳	回族	中学校	タクシー運転手	4000 元	既婚	23 歳
孫（女）	1 歳	回族					
三女	23 歳	回族	大学	高校教師	24000 元	未婚	

出所：筆者の調査（2005 年）による

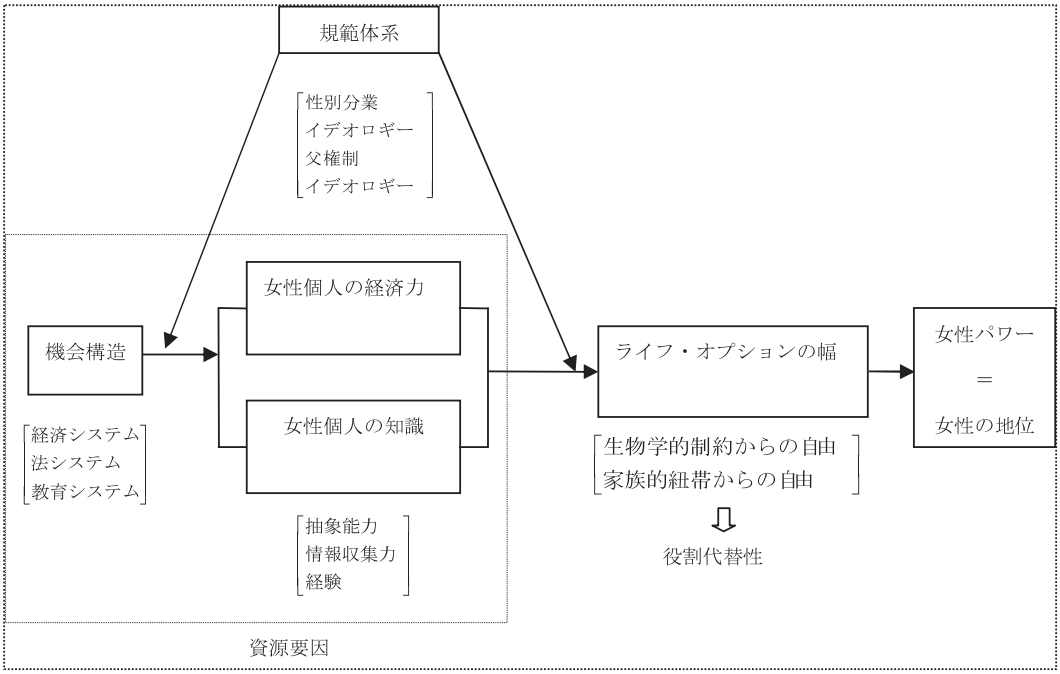
の妻，三女と上の孫しかいなかった．そのため，本稿での記述はほとんど第一回現地調査により，S氏家族の年齢も2005年11月当時の年齢にする（S 氏家族の基本状況に関しては表 1 を参照）．本稿では S 氏家族を「外」からの視点でみるのではなく，「内」側から「当事者」の視点に立って観察して得た結果をもとに考察を進める．

3. 女性のエンパワーメント・モデル

図 1 は目黒が女性の地位分析のための枠組みとして提示したものである．この枠組みは，1970 年代までの研究資料をもとにまとめられた試論であるが，国際的な女性の地位向上運動の中で，特に 1980 年代以降の基本概念として用いられるようになった「女性のエンパワーメント[6]」を考えるための一つの枠組みといえる．この概念はフェミニズムの視点に立つ女性の地位向上を意味している．つまり，女性が男性と同様に独立した社会的個人として，生き方及びその環境としての社会の仕組みについての意志決定を行なう力をつけることが，現代における女性の地位の向上であるという理解である．

図 1 では，機会構造，経済力，知識を資源要因とし，それが規範を媒介としてライフ・オプションを規定するとみなしている．女性のエンパワーメントは，そのような過程を経て実現されるというものである．ここでは，「家族」はライフ・オプションの要素という位置づけとなっている．男性による女性支配の原理が，男女の生物学的差異から派生した

図1　女性の地位分析の枠組み



出所：目黒依子『女役割―性支配の分析―』垣内出版，1980年，p. 95より

ジェンダーに基づくという立場で考えられた枠組みであるところから，家族理念そのものからの解放によって，女性の個人としての社会的地位が確立されるという図式である．本稿では女性のエンパワーメント・モデルを応用して，伝統的な役割分担や家父長制[7]の世界で生きている西北回族女性の現状を述べるとともに，このような現状に対しての回族女性の意識についても述べたいと思う．

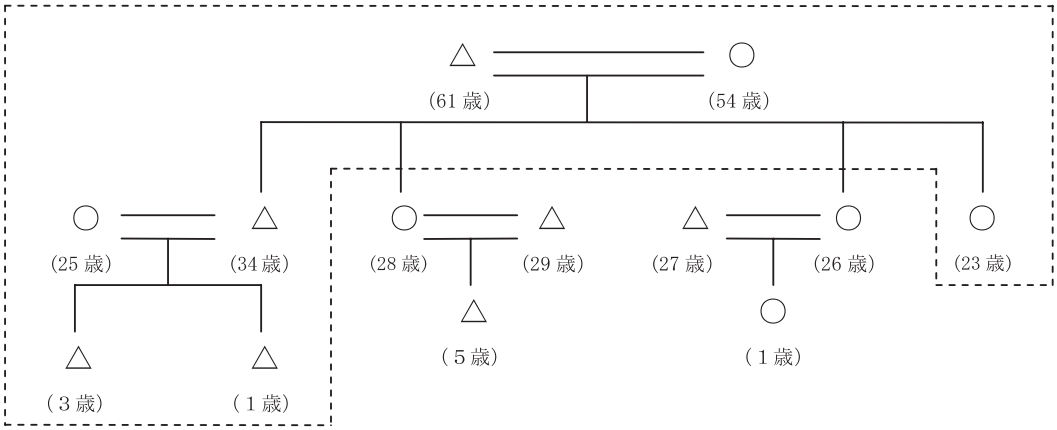
4. S氏家族の事例

4.1　S氏一家

図2から分かるように，長女と次女は結婚して家を出て，現在S氏宅に住んでいるのはS氏夫婦，長男夫婦及び長男の2人の息子，三女であり，7人からなる拡大家族である．長女と次女は同じ臨夏市に住んでおり，週に一回ぐらい実家に戻ってくる．S氏は虫草（中国に古くからある伝承薬の一種）の商売をしており[8]，妻は専業主婦である．2人とも学校教育を受けられなかった．お互いに相手の顔も知らないまま1969年に結婚した．当時S氏は25歳で，妻は18歳である．

1971年に長男が誕生した．長男は勉強に興味を持つことができず，中学校を卒業した後父親と一緒に商売をすることにした．長男は現在果洛蔵族自治州で虫草の商売をしている．イスラームの伝統祝祭日や仕事が暇な時，帰ってくる．私がS氏宅に滞在していた期間がちょうど開斎節（断食明けの祭典）だったため，幸運にも長男とも共同生活を送ることができた．長男は2001年に結婚[9]し，翌年に第一子（男の子）が誕生した．嫁が第二子を

図 2　S 氏の家族構成



出所：筆者作成

妊娠した時，女の子だと思って喜んでいたが，男の子だったのでがっかりしたという．嫁[10]は小学校三年生の時，経済的貧困で退学した．嫁も専業主婦である．

長女も勉強に興味を持てず，中学校一年生の時に中退した．結婚までにずっと家で家事を手伝った．婿は学歴（小学校）が低いが，商売（チベット族の民族衣装の商売）がうまく，経済的に恵まれている．長女は専業主婦で，毎日家の中で子供の世話や家事をしている．優しく，経済的能力がある夫と結婚し，子供にも恵まれている自分が幸せだと思うが，中学校を中退したことに悔しさを感じている．やはり学歴が高い者が人に尊敬され，社会で活躍できる．自分も知識があれば，外に出て仕事をしたいと語っている．

次女は幼少時より勉学に励み，成績も良かったが，残念なことに大学試験に落ちた．その後成人大学[11]の入試に受かり，大専（短期大学に相当）学歴を獲得した．現在臨夏市和平小学に勤めており，六年生に漢語を教えている．仕事を持っているので，毎日充実した生活を送ることができた．知り合いの紹介で現在の夫に出会った．学歴（中学校）が低かったため，最初は気に入らなかったが，父親の意志で結婚した．結婚後まじめで優しい夫の人柄に魅力を感じ，今は愛情を強く感じている．夫はタクシー運転手で，妻の仕事を支持している．仕事が忙しい時には，家事と育児を手伝ってくれるため，安心して外で働くことができると語っている．

三女は小さい頃から勉強に興味を持ち，成績も優秀で，高校卒業後西北師範大学に入学し，中国歴史を専攻した．大学時代に漢民族出身の男と交際した経験を持つが，父親の反対で別れた．大学院入試に参加したが，合格できなかったため，地元に戻り，臨夏中学に勤めるようになった．現在(2005年11月の時点）高校一年生に歴史を教えている．高校三年生まではイスラームの規定に即した生活を送ったが，大学に入学してから反抗的な態度を示すようになり，ベールも被らず，半ズボンや半袖を着て，漢民族の女性とあまり変わらぬ生活を送っている[12]．臨夏市の回族社会は閉鎖的な社会で，皆と異なっていると言われやすいため，常に自分の行動と言語に気を

つけている．臨夏市で住むのが息苦しいので，臨夏市を離れたいという．三女の結婚の問題で親は焦慮を覚えている[13]が，本人は自分が好きな人に出会えるまでは結婚したくないと語っている．

S氏の家族は中国社会に生きているにも関わらず，生活様式と習慣はイスラームの規定に則した形を取っている．三女以外の女は皆ベールを被り，男は皆白い帽子を被っている．イスラームの伝統年中行事を盛大に過ごし，中国の伝統年中行事，例えば旧正月，元旦などは過ごさない．S氏の妻は一日五回の礼拝を遵守しており，S氏は五回の礼拝を実行することは稀だが，毎週金曜日の集団礼拝には毎回参加しており，三女以外の子女もたまに礼拝をしている．S氏夫婦は清真寺で宗教知識を学んだことがあり，子供にも休みの時間を利用して清真寺で宗教知識を学ばせたことがある．ムスリムとしてイスラームの常識に通じるべきだと思っている．また子供四人を全部回族学校に通わせた．回族学校と一般学校は教育内容においては大きな差がないが，民族の習慣などが守られているため，回族学校に通わせたという．S氏の家庭は臨夏市の典型的なムスリム家庭であり，臨夏市の回族家庭の縮図[14]ともいえる．

4.2 家族の形

二回にわたる現地調査で訪問した10の回族家族の形を見てみると，一組の夫婦と未婚の子供（5家族），一組の夫婦と息子のうちの一人とその妻及び子供[15]（2家族），兄弟のそれぞれが結婚し子供をもうけてもそろって両親と同居する（3家族）という三つの家族構成がある．

S氏の家庭はS氏夫婦と既婚の長男及びその配偶者，子供，未婚の三女が同居している．S氏の家は1戸建てで，三つの居室，一つの客室・厨房・化粧室・沐浴室からなっている．S氏夫婦，長男夫婦，三女がそれぞれ一つの居室を占めている．下の孫は自分の親と寝るが，上の孫はお爺さん，お婆さんと寝る．家族全体の食費と諸経費は経済力のあるS氏と長男の共同出費となる．三女も働いているので，毎月2千元の収入があるが，共同出費として使うことはなく，全部自分の名義で銀行に貯金している．貯めたお金は結婚の際に使うという．家計については，S氏が管理しており，S氏の妻は家にお金がどのぐらいあるかもよく分からない．夫はお酒を飲まず，タバコも吸わず，家族に尽くすタイプで，夫に家計を任せると安心できるから，家計について知る必要がないと言っていた．しかも，S氏の妻はほとんど外出しないので，お金を使う機会はほとんどない．なお，長男の収入は全部母親に預け，母親はそれを夫のS氏に渡す[16]．長男の妻がお金を使う場合には姑つまりS氏の妻を通して舅つまりS氏からお金をもらい，夫か姑と一緒に買い物に行く．

4.3 夫婦関係

臨夏市の回族の人々の結婚年齢は早く，女は十七，八歳，男は二十一，二歳である．結婚相手は自分で選ぶ例もあるが，ほとんどは親が決める．一方の親が相手方の子女を気に入ると，族内の長輩や親戚，友人に縁談話をしてもらう．身分の貴賤に関わらず，相手方が善良でありさえすれば，申し込まれた方は結婚を喜んで承諾する．また，身近な人を配偶者に選ぶ傾向が強く，いまでも母方交叉イトコ婚が多く見られる．例えば，二回にわたる現地調査で出会った人々の中で母方交叉イ

トコ婚をした者は 4 人もいる．臨夏市民族宗教事務局の M 局長の話によれば，母方交叉イトコ婚を好む理由は嫁姑が同じ出自集団の出身であるため，嫁姑関係が滑らかになり，家族の和を維持できるからだという．男女の役割分担においては，「男は外，女は内」という伝統的性別役割分担の形が主である．

S 氏の一家をみると，イトコ婚をした人はいないが，皆当事者の親や親族が介入する協定結婚をした．男女の役割分担においては，S 氏と長男は外向きを担当し，S 氏の妻と長男の嫁は内向きを担当する．

S 氏の一日の生活は朝 8 時に朝食を食べ，昼 12 時半に昼食を食べ，午後 6 時半に夕食を食べ，夜 10 時に寝る．それ以外の時間はほとんど外出し，たまに家で孫と一緒に遊ぶ．外出してすることは，友達とおしゃべりをするか，日常用品を買うか，他人の招待に参加するか，金曜日の集団礼拝に参加するなどである．S 氏の妻についての評価と女性の社会進出についての見方は次の通りである．

「妻は優しく，良妻賢母の性格の持ち主です．家事をこなし，子供の世話もよくしたので，安心して外で働くことができました．二人の娘が高学歴で，安定した仕事に就くことができたのは，母親の努力と密接に関連しています．子供を立派に育てた妻にとても満足しています．女性の役割は家庭内にあると思うので，女性の社会進出にはあまり賛成できません．」

S 氏の妻の一日の生活は食事と睡眠の時間以外は，部屋の掃除をするか，孫の面倒を見るか，礼拝をする．ほとんど家の中におり，外出はしない．日常生活用品は男が買ってくるので，自分の服を買うか，親戚に会いに行く時だけ外出する．三女が西北師範大学に在籍していた時，夫と一緒に三女に会いに蘭州市に行った以外は，臨夏市を離れたことがない．外にあまり出ないため，臨夏市内でも一人で外出すると，道に迷う時があるという．夫に何を期待しているかと聞いたら，「夫は家庭の生計のため，外で一生懸命働いています．普段優しくしてくれるし，私の意見もたまに聞いてくれるし，喧嘩したこともあまりないため，これ以上期待するものはないです．」と答えてくれた．妻としての自覚については，「夫が外で働くのはつらいことなので，私は家事をこなし，子供の世話をすべきで，仕事で疲れた夫を慰めてあげて，優しくしてあげるべきです．自分は知識がなく，年も取っているので，外に出て仕事しようと思っていないが，今の若者は知識を身につけ，仕事を持つべきです．」と話している．

長男は一年中，果洛蔵族自治州で過ごす日が多く，普段は商売で忙しい．開斎節を家族と過ごすために，臨夏市に戻り，15 日間休んだ後にまた果洛蔵族自治州に行く．臨夏にいた何日間の生活は父親とほぼ同じである．長男の妻の一日の生活は，毎朝 7 時に家の誰よりも早く起きて，庭と部屋の掃除をし，朝食を作る．8 時に家族と一緒に朝食を食べ，その後は家事をし，子供の世話をする．昼 12 時半前に昼食を作り，12 時半には昼食を食べる．午後 6 時半までの間，また家事をし，子供の世話をする．午後6時半に夕食を食べ，夜 10 時までには家事をし，子供の世話をし，10 時になったら寝る．果洛蔵族自治州まで夫に会いに行き，夏河県の拉卜楞寺に旅行に行った以外，臨夏を出たことがない．

長男からみた妻は，「良妻賢母で，長期間家にいない私の代わり，親の面倒を見ているし，家事もこなし，子供の教育もしっかりやって

います．性格と外見が全部いいので，私にとっては理想的な妻です．妻が外に出て仕事してほしくないです．2人とも外で働くと，家事と子供の教育をする人がいなくなり，家庭が潰れるようになるからです．」

妻からみた夫は，「優しく，家族のため外で一生懸命働いています．人柄と収入などにおおむね満足していますが，ただ稼いだお金を全部姑に預けているので，それはちょっと不満です．自分にお金がないので，実家に戻って母親から小遣いをもらって使います．また，すべてのことにおいて私の意見を聞かずに，自分で物事を決めることにもちょっと不満があります．自分が専業主婦になるのは自分の知識水準が低いので，外に出ても何もできないからで，もし自分に知識と能力があれば，外に出て仕事したいです．」

4.4 親子関係

臨夏市の回族社会では，現在でも父系出自を重んじる家族規範が根強く定着している．S氏も家を継ぎ，将来親の面倒を見るのは息子であると思っており，息子への期待が大きかった．彼は自分の学校教育を受けられなかったことを残念に思っており，自分の息子には学校教育を受けさせたいと思い，息子が希望さえあれば，大学教育，更に留学もさせたいと思っていた．しかし，長男は勉強に興味を持てなく，中学校を卒業してからは進学をやめた．長男が学校をやめると話し出した時，失望のあまり何日間も息子と話さなかったという．S氏は商売の仕事は疲れるばかりでなく，収入も安定していないから，息子は大学を卒業して，その後安定した仕事をしてほしいと希望していた．

S氏の息子への高学歴と良い進路の期待と比べると，娘への高学歴と良い進路への期待は高くない．彼は女の子でも良い教育を受けることはいいことであるが，その必要性はあまりないと思っている．女にとって一番いい将来は良い旦那を見つけて幸せな家庭生活を送ることで，専業主婦になることであると思っている．良い専業主婦になるためには高学歴を獲得することより，家事の切り盛りや子供の世話をよくすることであり，学歴は中学校卒業ぐらいだけで十分だと思っている．

S氏と異なって，S氏の妻は息子と娘に関係なく，子供の教育に熱心である．彼女は女でも教育を受けるべきで，社会に進出すべきだと思っている[17]．経済的に苦しんで一人の子しか教育を受けさせない場合にも，専ら男の子を優先することではなく，成績の一番良く，一番出世できそうな子供を優先するという．よく子供の相談相手になり，子供の悩みを聞いてあげたり，アドバイスをしてあげたりする．

母親と父親について三女は次のように語っている．「母は外柔内剛な人で，私が落ち込んでいる時にはいつも気合を入れてくれ，慰めてくれました．母のおかげで，大学での学習生活を無事に終えることができたし，外へ出て働くことができました．母にとても感謝しております．父は優しいが，男尊女卑の考え方を持っており，何でも兄を優先させるので，ちょっと不満です．」

一方，S氏の子供たちも両親に孝行しており，親の言うことならほとんど聞く．長男が最初の妻と離婚したことも親の意見を聞いた結果であり，三女が大学時代の交際相手と別れたのも親から反対されたからである．長女と次女の結婚相手も親が決め，親の意志で結婚した．彼らは自分を産んでくれて，育てて

くれて，社会に生きるために必要な常識や生活能力を教えてくれた両親に常に感謝の気持ちを持っている．家では親の権限が大きく，すべての事柄において親特に父親に決定権がある．長男は収入のすべてを親に預けており，長女と次女も年に一定のお金を親に渡している[18]．

4.5 姑と嫁の関係

これまでの研究において「嫁である層はいやだという意識に，姑である層はよかったというそれに結びつく傾向が強い」（根笈 1993：19），「全体的に姑より嫁のほうがギャップを大きく感じている」（佐野 1988：55）と述べられているのと同様に，S 氏の妻の嫁への評価は概ねよかったが，嫁の姑への不満は多い．

まず，姑の嫁への評価について見てみよう．姑からみた嫁は，親に孝行し，夫を尊敬しており，子供の世話もよくしている．睦まじい家族関係を作るために努力しており，家事もよくこなしているので，概ね満足しているが，一日五回の礼拝をしないことが少し気になっている．

嫁の姑への評価は次の通りである．嫁は姑によく見せるために色々努力してきて，家事も全て一人でこなし，すべてのことにおいて姑の言う通りにしてきた．しかし，姑は嫁のやることが気に入らないようで，よく文句を言っている．その理由について嫁は世間の姑は皆同じで，自分の娘には優しいが，嫁には厳しいからと思っている．週に一回ぐらい実家に戻る時も，行く度に姑の許可をもらわなければならなく，買い物に行く時にも姑が必ず随行して行く．お金も自由に使えなく，いつも姑から小遣いをもらって使う．このように家庭内で話す権利がなく，姑にいじめられるのは，収入がないからで，お金を稼げない以上，すべてを我慢しなければならないと思っている．

嫁の姑への不満はこれだけではない．2 人の孫を平等に扱わなく，長孫（一番上の孫）は大好きで，可愛がっているが，下の孫はあまり可愛がっていないことにも不満を感じている．下の孫が好きでない理由は，下の子がよく泣くことによると嫁は語っている．よく観察してみると，姑は確かに人の前でも長孫が可愛いと言い，おいしいものがあれば先に長孫にあげる．下の孫が泣き始めたら，「また泣いてるの？」と言いながら見ぬふりをしていた．長孫に「ママと婆ちゃん，どっちがいい？」と聞き，長孫が「婆ちゃんがいい．」と答えたら喜んでキスしてあげる．長孫を毎日自分のそばに寝かせているが，下の孫は抱っこしてあげたことも見られなかった．

4.6 兄弟関係

三姉妹の関係をみると，皆仲がいいが，その中でも次女と三女の関係が最もいい．2 人とも高学歴で，社会に出て働いているので，共通の話題が多いからである．長女と次女が実家に戻った時にも，三女は次女にはいろいろ聞き，話が長かったが，長女とはあまり話していなかった．長女も自分の母親と少し話した後には黙々と座っていた．

兄妹関係の中で長男は長女，次女とは関係はいいが，三女とはよく喧嘩する．長男と三女はお互いに相手があまり好きではないようで，相手の言行についてあまり理解を示していない．まず，兄の妹に対する見方である．妹は高校生の時まではイスラームの規定に即した生活をしていたが，大学に入ってからはとても反逆的になり，ベールも被らず，半袖，

半ズボンなどを着ており，漢民族の女性とあまり変わらない生活を送っている．結婚相手も漢民族の男性が好きで，付き合った人と気に入った男性はみな漢民族であった．そのことがムスリムとしての強いアイデンティティを持っている兄には受け入れられないようである．兄の話によれば，妹はムスリムであるため，結婚相手も同じムスリムでなければならなく（内婚原理），どうしても漢民族と結婚したいなら，まず相手をイスラームに帰依させるべきだという．兄は妹の反逆的な性格の形成は教育レベルの向上によるもので，女性の教育レベルの向上は，子供の教育に有利であるが，一方，女性を強く，反逆的にさせ，他人の話をあまり聴かない人間にしてしまうと語っている．

次は妹の兄への見方である．服装について親も干渉していないのに，兄はよく干渉し，学校の異性の同僚と少し話しても兄に注意される．自分がムスリムであることを忘れておらず，イスラームのある規定について受け入れられないこと以外に，多くの面においてイスラームの規定を守っているにも関わらず，兄にいろいろ言われるのは，気分が悪いことである．兄だけではなく，臨夏市の回族社会全般に，男尊女卑，伝統的性別役割分担の観念が強く，女性なら家庭に閉じ込められており，男性に従属される生活を送るのが普通であるが，彼女はこのような生活には不満があり，このような環境から抜け出したいと思っている．このような環境から抜け出すためには，大学院入試に受かることが肝心で，これから大学院入学試験の準備に自分の力を尽くしたいと思っている．

4.7　義理の兄弟関係

三女と長男の嫁との関係について論述しよう．三女は低学歴の義理のお姉さんを軽視しているような感じがあり，義理の姉も三女のこのような態度に不満がある．三女は義理の姉について次のように語っている．

「義理の姉は典型的な小女人（自分の見解がなく，すべての面において夫の話を聞く女のこと）です．兄の言うことは何でも聞きます．兄は彼女にとっては精神的拠り所です．彼女は学歴が低く，毎日家の中にだけいるので，外の世界は何も分からなく，兄に頼るしかないですね．兄はこんな女が好きです．兄と義理の姉はとても似合っています．」

嫁の義理の妹への評価は次の通りである．義理の妹は職場から帰ったら家事は何もせずに，嫁に会っても挨拶するどころか，見て見ないふりをしている．嫁が家事をすることは当たり前のように思い，何も手伝わない．彼女には知識があり，仕事を持っているから，嫁のような知識もなく，専業主婦になっている女性を軽蔑している．しかも，彼女は姑の前で嫁の悪口をよく言い，嫁と姑の関係を悪くさせている．彼女も姑と同様に嫁の一番目の息子を可愛がっているが，二番目の息子はあまり好意を抱いていない．

筆者がS氏宅に滞在していた何日間，三女は確かに仕事に行っても仕事から戻っても，義理の姉に挨拶をすることは見られなかった．料理を作ることはあったが，それは筆者のためであり，普段は家事をしないと言っていた．一日の生活は，平日は朝7時半に起き，朝食を食べ，8時15分に仕事に出かける．12時から午後2時半までは昼休みの時間なので，家に戻り，昼食を食べ，昼寝をする．2時半から5時まではまた職場におり，5時以後に

帰宅する．帰宅したら母親とおしゃべりをしたり，甥と遊んだりしながら，夕食の出来上がりを待つ．夕食が終わったら，生徒の宿題や試験問題をチェックしたり，本を読んだりするが，10 時になるとすぐ寝る．土，日曜日は仕事は休みなので，普段よりは遅く起き，食事が終わったら本を読んだり，買い物に行ったり，友達に会いに行ったりする．

5. 考察と分析

以上，本稿では中国におけるムスリム社会の家族関係，女性の家庭生活のありかたとその背景にある意識様態を解明する目的で，臨夏市の回族出身者であるＳ氏の家族を事例にして，Ｓ氏一家の家族構成，日常生活，家族関係について述べてきた．

Ｓ氏の家族は，三世代二組の夫婦が同居している拡大家族である．二組の夫婦の日々の生活は，男は商売に出かけるか，日常用品を買うか，他人の招待に参加するか，金曜日の集団礼拝に参加するなどほとんど外にいるが，女は外に出ることはめったになく，ほとんど家の中で家事や子供の世話をしている．夫婦の間は，支配と被支配の関係までにはいかなかったが，主導権，決定権を握るのは男性であり，女性はその指示下にある．親子関係，特に父親と子供の関係は命令者と服従者の関係であり，兄弟の間はイスラーム信仰をめぐって長男と三女はお互いに気に入らない所がある．このことからＳ氏一家の家族間の関係は必ずしも良好とは言えないだろう．

Ｓ氏一家に存在している家父長制の家族倫理には儒教とイスラームの影響があり，両者が融合したのは 300 年ぐらい前のことだと考えられる．明代の末から清代の初まで，王岱輿，馬注，劉智などの回族出身者の倫理思想家たちは儒教思想を用いてイスラームを解釈する運動を起こし，イスラームの中国化を促進した（敏 2007：32）．彼らの家庭における倫理思想の内容は大まかに言うと，夫婦間の倫理は「夫が妻を養い，妻は家事をこなし，常に補助的な役割を果たす．夫は妻を教育し，妻は夫に従う」であり，親子間の倫理は「親は子供を扶養・教育し，子供は親に孝養する」であり，兄弟間の倫理は「兄は寛容なる精神で弟と付き合い，弟は兄に我慢しなければならない」である（梁 2007：38–40）．

その後の 1900 年代初の清末から 1940 年代の民国期に回族社会ではイスラーム新文化運動が起こったが，その運動の出発点は，回族が生き残るための方策を探求することであり，上述の明末清初の王岱輿，馬注，劉智らによる儒教的イスラーム解釈運動と本質はあまり変わらない．イスラーム新文化運動は，統一意識が希薄であった中国のムスリムを回というエスニック集団として凝集させ，回としてのエスニック・アイデンティティと中華民族としてのナショナル・アイデンティティを複合させたが（松本 2000：100），家庭における倫理思想の内容を変えることはできなかった．

1949 年の新中国の成立，さらには 1978 年の改革開放を経て，中国社会では男尊女卑思想がほぼなくなり，女性の地位は著しく向上されたが，それは都市部や経済的に発展している地域の女性に限っており，農村部や貧困地域では今もなお昔からの慣習に縛られて生きている女性が多い．臨夏市は都市部に含まれているにも関わらず，経済的に遅れているところであり，東南沿海地域と比べると比較的に封建的な地域である．特に近年のイスラーム復興運動の影響で自文化を見直し，自

文化への帰依を望んでいる臨夏市の回族社会では父権制つまり家父長制イデオロギーが強い．S氏の家庭に生きている伝統的な家庭倫理の思想が，これを説明できるだろう．

女性の生き方については，S氏の妻と長男の妻は，様々な面においてイスラームの規定に則した生活を送っているが，三女はイスラームの規定と主流社会の文化を混合した生活を送っている．すなわち三女は，ムスリムとしての回族と中国人の狭間にある矛盾と葛藤の中で生きている．彼女は漢民族化の生活スタイルに憧れていながら，ムスリムとしてのアイデンティティを持っている[19]ので，脱ムスリム式の生活とムスリム式の生活の選択で常に悩んでいる．彼女はイスラームの服装についての規定と男女隔離規則についてだけではなく，女性の役割を家庭内に限定させる点についても不満を感じている．彼女は自分の運命を変えるためには大学に入り，その後は臨夏市を離れることしかないと思っていた．そのため，彼女は幼い頃から勉強に励んできて，今は大学院入学試験に再チャレンジしようとしている．

一方，S氏の妻と長男の妻は一日部屋の中にいるため，外の世界とは隔絶されており，一日の生活は家事の切り盛りや育児などで過ごしている．すべてのことにおいて，自分自身で意志を決定できなく，夫の意志に従って行動している．祖母になったS氏の妻は嫁の前では権利を持っており，地位が高いが，夫にリードされる運命から抜け出せなかった．彼女は年を取っているせいで，生き方について考えたことがないし，自分の生き方を変えようともしていない．しかし，長男の妻は自分の生き方に不満を感じており，生き方を変えたいと思っている．

S氏の妻，長男の妻，三女は皆回族家庭で生まれ，回族の親からしつけをされたにも関わらず，三人の運命と人生観はこのように異なっている．その原因は年齢の差にも関係があると思われるが，それより学歴の高低によると思われる．中国で学校教育を受けた年数が長くなればなるほど，「男は外，女は内」という観念を受け入れなくなり，社会的な女になる．なぜならば，中国の学校では，男女平等に基づき，各分野での男女同権の教育を行なっており，教師たちは男子生徒，女子生徒に関係なく，社会で活躍できる人材を育てるよう努力している．このような男女平等の教育のもとで，女性一人一人は小さい時から大きな理想を持って，キャリアウーマンになることを目指している．高等教育を受けた三女ももちろんキャリアウーマンになることを夢見ており，将来は大学の教師になることを願望している．しかし，S氏の妻は非識字者で，長男の妻も小学校を中退したため，男女平等の教育を受けられなく，社会労働への従事など女性の生き方について考えたこともないのは当然であろう．

ここで，図1で示した女性のエンパワーメント・モデルをS氏の妻，長男の妻，三女の事例に応用してみると，三人の事例はいずれも本モデルに当てはまっていることがわかる．まず三女の事例から見てみる．中国の学校教育では，教育システムにおいて男女が等しく教育を受ける機会を与え，教育内容の男女平等を行なっている．三女はこのような中国の学校で教育を受け，大学まで入ることができ，教養知識を身につけることができた．さらに，法システムにおいて，政治的，経済的，文化・教育的，社会的に男女が平等な権利を有することを保障し，経済システムにおいても男女

に均等な雇用の機会と待遇を保障している中国社会で働き，経済力を持つことができた．家庭教育における性別分業イデオロギー，父権制イデオロギーの影響を受けたが，その影響力は学校，特に大学に入学してから弱くなっている．三女の通った西北師範大学の女子学生たちは女性の社会進出を当たり前のように思っており，ほとんどの学生は卒業したら会社員や公務員や教師など社会労働に従事するようになる．夫婦の間の役割分担についても，夫婦で仕事・家事・育児をすることを当たり前に思っている．生き方においても，個人としての開花を大事にしており，男性と対等に付き合う生活を送っている．三女にとって大学時代の友達の影響は大きく，彼らの影響で女性でも自分の考え方を持つべきで，男性に左右されず，自分で自分の生き方を選ぶべきだと思っている．このように，三女にとって機会構造，経済力，知識のような資源要因は整っており，性別分業イデオロギー，父権制イデオロギーなどの規範の影響もあまり受けていないため，彼女のライフ・オプションの幅は広くなっており，地位も高くなっている．

逆に，S氏の妻と長男の妻は機会構造が整っている中国社会に生きているにも関わらず，学校教育をあまり受けられなかったため，知識がなく，それに伴う経済力もない．そのうえ，小さい頃から家庭教育による性別分業イデオロギーと父権制イデオロギーの影響を大いに受けており，結婚相手も性別分業イデオロギーと父権制イデオロギーの強い回族男性であるため，日々の生活は性別分業イデオロギーと父権制イデオロギーの規範の中で送っている．さらに，毎日家の中にいるため，外部社会の男女平等のイデオロギーの影響をあまり受けず，現在のような生活をあたり前のように思っている．このように，S氏の妻と長男の妻にとって，ライフ・オプションの幅を広くさせるのに必要な経済力と知識がなく，しかも，性別分業イデオロギーと父権制イデオロギーの影響も強いため，ライフ・オプションの幅が狭くなっており，地位も低いのである．

6. おわりに

中国は1949年に社会主義政権を樹立してから，国家の基本政策として男女平等が掲げられ，女性の社会進出を促進するという政策を実施した．仕事に就く際も賃金の支払いの際も女性が不利を被ることがないよう，様々な政策の実施や直接的な指導を行なってきた．そのおかげで今日の中国の女性は，結婚しても出産しても働き続けることがごく当たり前の生活習慣として身についているといっても過言ではない．このようなことが可能なのは，中国の女性特有のたくましさにもあろう（山中2004：255–256）が，もう一つの性である男性の協力や理解も大きく影響している．中国では仕事を持っているにも関わらず，毎日腕によりをかけて料理を作り，仕事から帰ってきた妻と食卓を囲む男性が珍しくない．中国では都市部に限って言えば夫婦で稼ぎ，夫婦で家事と育児を行うことが一般的なライフスタイルとして定着している．

ところが，回族出身者のS氏の家庭[20]では伝統的役割分担の観念がいまもなお強調されており，男は外で働き，女は家を守っている．近代化によって都市部で起きた「男性は雇用労働・女性は家事労働」という日本の性別分業，すなわち女性の主婦化とは異なって，S

氏の家庭ではイスラームと儒教の影響で形成された家父長制による女性の主婦化であると思われる[21]．彼女たちは日本の専業主婦のように趣味活動，社会奉仕活動などに参加することができないことはもちろん，男の許可なしに外に出ることは不可能である．また家計を妻が管理しているという点では，夫とは対等な関係にある日本の専業主婦とは異なって，S氏の妻と長男の妻は家計について干渉できなく，夫と非対等な関係にある．S氏の妻と長男の妻は社会から隔離されており，社会事情が分からなく，社会的地位はもちろん家庭内での地位も低い．自分の地位の低さについてS氏の妻は特に不満を感じていないようであるが，若い女性の高学歴取得と社会労働への従事について肯定的であることから，女性の地位向上は期待していると思われる．一方，長男の妻は自分の地位の低さについてはっきり不満を言い，地位向上を望んでいる．彼女は自分の地位の低さの原因は自分の知識レベルの低さに伴う無収入からくると思っている．彼女は高学歴を取得し，社会に出て働いている義理の妹を羨んでおり，社会進出[22]を望んでいる．

長男の妻が言った通り，彼女の地位の低さの原因は確かに知識レベルの低さに伴う無収入にある．では，なぜ経済システム，法システム，教育システムにおいて男女平等な機会構造が整っている[23]中国社会に生きているにも関わらず，長男の妻は知識と経済力がないかという疑問が生じる．その主な原因は性別分業イデオロギーや父権制イデオロギーの影響と経済的貧困にあると思われる．長男の妻が小さい時家庭は貧しく，親は全ての子供に平等に学校教育を受けさせなく，学校への就学を弟に優先させ，結婚したら「赤の他人」になる彼女を小学校3年生の時中退させた．それで彼女は学校教育によって得る知識更には経済力を持てなくなった．彼女への教育は母親を通しての教育が中心であり，教育内容は料理，裁縫などの家事技術や妻としての躾であった．例えば，長男の妻は十二歳になってから「毎朝七時に家の誰よりも早く起きて，庭と家の中の掃除をし，それから朝食を作り，夫の出勤後は裁縫，洗濯などの家事をするという生活」をさせられたという．このような家庭教育は彼女の人生観に大きく影響しており，人生のゴールは結婚であり，女性なら家事や育児はもちろん夫を尊敬し，夫の意志に違反することをしてはいけないと思っている．彼女自身の人生観と夫の伝統的な役割分担や家父長の観念がマッチしており，長い間社会での活躍はもちろん家庭内においても発言権を持てなく，いつも夫にリードされ，従属される局面に陥っている．

ここまで夫に従属し，家庭内に閉じこめられて生きているS氏の妻及び嫁の現状とこのような現状に対しての両者の意識について述べてきた．ところで，回族女性の役割や社会進出に対して民族宗教事務局やイスラーム協会の役員たちはどう思っているのか．「今のところ，女性の社会進出を促進するような具体的な指導は行なっておりませんが，女性の役割は家庭内にだけあることではなく，民族振興と国家建設においての女性の役割も大きいです．女性でも社会に出て自分の能力を発揮すべきです．」という臨夏市民族宗教事務局のM局長と臨夏市イスラーム協会のZ主任のインタビューから分かるように，民族宗教事務局とイスラーム協会の役員たちは女性の社会進出に賛成しており，女性の役割は家庭外にもあると思っている．民族宗教事務局や

イスラーム協会の役員たちの女性の役割や社会進出についての肯定的な見方とS氏の妻と嫁のような回族女性の社会進出への願望によって，臨夏市の回族女性の地位の向上は時間がかかるものの，不可能ではないと思われる．

また，女性の地位を向上させるには教育レベルの向上が欠かせないと考えられる．S氏の妻と嫁の場合，〈清真女校[24]〉に通うなど，知識を吸収するのが大事であろう．清真女校では宗教知識と文化知識を教えており，宗教知識の習得から自分の能力を回族社会に認めさせ，文化知識の学習から社会的自立を獲得する可能性がある．現実に近年，イスラームへの完全な帰依によって社会的自立を図ろうとしている回族出身のイスラーム的フェミニスト[25]たちがいる．たとえば，臨夏中阿女校の教師及び学生，民族宗教事務局の女性スタッフである．彼女たちは，敬虔なムスリム女性として家族や地域で尊敬され，清真女校の教師や清真女寺のアホンや宗教事務局の職員になることで実利を得ている．これらは，イスラームの伝統を壊すことがなく，自分の価値の実現と地位の向上を図る，許された範囲でのエンパワーメントといえるだろう．彼女たちはイスラームの論理に基づいて，なるべく現実の社会状況に対応しようと努力しているのである．このように，彼女たちが自分の価値の実現と地位向上を望みながらも，イスラーム的なものにこだわっている理由は，現在イスラーム世界に見られる女性蔑視は，イスラームの本来の思想に背離したからで，イスラームの本来の教えに基づけば，女性の地位は高くなると思っているからである．

中国において女性の高学歴化は進んでおり，臨夏市の回族社会においても高学歴の女性が増えている．したがって，三女のような，ムスリム女性の置かれている状況について疑問を持ち，声をあげる女性も現われている．彼女たちは自分の声を発信することを通じて，世間の注目を集め，自分たちの不利な状況を変えようとしているのである．しかし，回族女性たちの運命は彼女ら自身の努力だけでは変えられなく，民族宗教事務局やイスラーム協会のサポートも必要になる．臨夏市の回族社会では男尊女卑や伝統的な性別役割分担の観念が根強く，これらの観念をなくすことは難しい．ここで，清真寺の管理運営を監督・指導する権利を持っている民族宗教事務局やイスラーム協会の力を利用すれば，清真寺のアホンの女性の役割や社会進出に対しての認識を変えることができる．そして，回族社会において威信の高い清真寺のアホンたちの力を利用し，一般の回族の人々の考え方を変えることができる．女性の役割や社会進出についての一般の回族の考え方が開放的になると，女性の地位は当然高くなると思われる．このように，民族宗教事務局やイスラーム協会は回族社会の男尊女卑や伝統的な性別役割分担の観念の払拭において役割を果たすことができるだろう．民族宗教事務局やイスラーム協会の手助けがあれば，臨夏市の回族女性たちの地位向上の夢は早期に実現できると考えられる．

注

1）回族はよく中国のムスリムと説明されるが，厳格には中国のムスリム全てが回族ではない．中国にはイスラーム教を信じる民族が10あり，回族はその中の一つに過ぎない．テュルク系ムスリムとは異なって，回族は服装，顔付きと言葉では漢民族と全く区別がつかない．人口は

2005年の時点で981万6805人であり，壮族，満族に次ぎ，三番目に多い少数民族であり（中華人民共和国国家統計局2006:50），中国最大のムスリム集団である．主に寧夏回族自治区に集中的に居住し，甘粛省，河南省，新疆省，青海省，雲南省，河北省，山東省などの地域に規模は異なるが集中的に居住している．

2）本稿でいう「家族」概念は「世帯」概念のことで，現に一つ屋根の下で同居し食事を共にしている人々を指し，結婚して別居した子女はそこから除外される．世帯は通常，家族関係を中心に形成されるが，世帯員が全て家族員から構成されるとは限らない．家族員ではない同居人や使用人も住居と生計とが共同であるならば，同一世帯の世帯員とされる．家族員には同居家族員のほかに，就学，就職，出稼ぎなどにより世帯を別にする別居家族員がいる．一つの家族がそのまま同一世帯を形成するならば，家族と世帯は完全に重なり，家族員イコール世帯員となる．臨夏市の回族社会では使用人を雇うとか，結婚前に同居する現象は見られないので，本稿でいう「家族」は正確に言うと，現に一つ屋根の下で同居し食事を共にしている家族員たちである．

3）家庭とは，生活を共にする夫婦・親子などの家族の成員で創られていく集まり，および家族が生活する場所を指し，主に家（家屋）と不可分である．しかし「家」という容器を持たず・あるいは一般には家と認識されないその他のものに居住する家族もあるため，家庭そのものが「家」という容器に依存するかどうかは，その家族が属する文化にもより一概には言えない．

4）中華人民共和国国家統計局『中国統計年鑑2004』中国統計出版社，2004年，p. 53，p. 63より

5）筆者の出身大学は中国の蘭州大学であり，甘粛省蘭州市で5年間生活したことがある．現地調査を行なう前に，大学時代の恩師である田秋生教授に臨夏市の要人の紹介を頼んだが，田教授は臨夏中学の王校長を紹介してくれた．王校長は，二回にわたる現地調査の手配人であり，S氏宅でのホームステイや回族家庭の訪問や官庁の幹部へのインタビューなどは全部王校長のコネで行なうことができた．

6）女性の地位向上という観点からエンパワーメント，「力をつける」を定義すれば，エンパワーメントとは，女性の自己認識とともに，社会が女性に対してもつ認識，更に女性の役割と機能の決められ方を変えることによって，ジェンダー関係に影響を与えようとする，その過程である（United Nations1994: 75）．強調点は二つある．一つは，一握りの女たちではなく，大勢の女性の行動・運動様式に関わるものであり，二つ目は，個人行動ではなく，連帯を志向する共同行動である．

7）家父長制は，広義においては，男性に特権を与える社会一般を指し，狭義においては，年長の男性である家父長が，血縁集団である「家」を支配する制度を指す．家父長制の下では，男性が女性より優れており，男女にそれぞれ適した役割があって，それは女性にとって家事，育児であるというイデオロギー的基盤がある．

8）若い時に果洛蔵族自治州で虫草の商売をしていたが，今は年を取ったため，すべての仕事を長男に任せて自分は臨夏市に戻ってきた．商売が忙しい時だけ，果洛蔵族自治州に行き，息子の手伝いをしている．第二回現地調査の時は，ちょうど仕事が忙しい時期だったので，果洛蔵族自治州で長男の仕事を手伝っていた．

9）二回目の結婚である．最初の妻は彼が果洛蔵族自治州で商売をしている間，浮気したことが発覚し離婚した．浮気したことの証拠は，町で他の男性と話していることが人に見られたことである．元妻との間は子供がいない．臨夏市の回族社会において，離婚現象はめったに見られなく，夫婦とも高学歴，高収入な家庭に稀に見られる．しかし，学歴が低く，男女隔離の伝統を大事にしている男性の中には，妻が他の男性と少し話しても離婚を申し出るケースもある（長男の妻の話による）．

10）嫁は1980年に臨夏市の回族家庭で生まれた．父親は果物や野菜の小売をしており，母親は専業主婦であるが，たまに父親の仕事を手伝っている．妹と弟がおり，2人とも結婚している．妹は専業主婦で，妹の夫はタクシーの運転手である．弟は日常生活用品を販売する小さな店を経営している．経済的に恵まれていなかったため，彼女は小学校三年生，妹は小学校五年生の時退学した．親は弟には少なくとも高校レベルの教育を受けさせたかったが，勉強に興味を持っていなかった弟は，中学校を卒業してから自ら学校をやめた．母親は父親に従順で，父親が言うことは全部聞く人で，彼女と妹にもよく「夫を尊敬し，夫に従うように」と日頃覚している．

11）成人大学は正規大学と相対する言葉で，文字

通り大人たちが通う大学である．毎年10月に各大学で入学試験があり，高校或いは専門学校以上の学歴を持っている者なら，誰でも試験を受けられる．試験の難易程度は正規大学の試験より簡単で，合格点数も低いので，ある程度の知識を持っている人ならほとんど合格できる．成人大学の教師のほとんどはアルバイトをする在籍大学生で，教務経験もあまりなく，知識レベルも低い．

12）三女が漢民族の女性とあまり変わらぬ生活を送るようになったのは，大学時代の友達の影響があったからである．三女の通った西北師範大学の女子学生たちは半袖や半ズボンなどを普通に着用しており，ハイヒールを履いたり，パーマをかけたり，ファッションを大事にしている．このような環境で数年間生活したことのある三女は，周りの影響を受けて自分もそのような生活を送るようになったのである．特に，大学時代に付き合ったことのある漢民族出身の恋人の影響が大きく，彼の影響で有神論について不信感を持つようになり，イスラーム教についての認識が変わるようになったという．

13）臨夏市では女が17，18歳になれば結婚する現象があり，23歳になった三女は当地では年長の女にみられる．大学教育を受けた女は結婚が少し遅れることもあるが，大学を卒業したらすぐ結婚し，もし結婚が遅ければ，皆に結婚できない女だと笑われるという．

14）これは三女の話によるが，二回にわたる現地調査から筆者も確かにそうだと思うようになった．臨夏市の回族社会において，多くの家庭では男は商売をしており，女は専業主婦で，家事と育児を主に担当している．また，多くの家庭で女性はベールを被り，男性は白い帽子を被っており，イスラームの伝統祝祭日だけを盛大に過ごす．更に多くの家庭で男性たちは生計のために忙しく，金曜日の集団礼拝しかできないが，専業主婦たち特に年寄りは一日五回の礼拝をきちんとしている．

15）一組の夫婦と息子のうちの一人，その妻及び子供が同居する場合，臨夏市の回族の風習としては，経済的自立と結婚により子供達が別居する傾向が強く，最終的に親が末子夫婦と同居する．

16）長男が自分の収入を父親に直接渡さず，母親を通して渡す理由は，個人的に母親のことがもっと好きで，家計の状況についてほとんど知らない母親にも自分の収入状況を教えたいからだという．

17）S氏の妻は伝統的な専業主婦でありながら，娘の教育に熱心であり女性の社会進出にも前向きである理由は，彼女自身の経歴から女性の高学歴や社会進出の重要性を認識したからである．S氏の妻は結婚後，20年間ほど舅・姑と同居していたが，そのとき姑からいろいろ大変な思いをさせられた．舅・姑は十年ぐらい前になくなり，自分自身が姑になっている現在でも，家庭内での地位はあまり高くなく，多くの面において，夫に従わなければならない．このような状況に置かれた主な原因は，自分自身が経済的に夫に頼らなければならないからで，「娘には自分と同じ苦労を体験させたくない．そのためには，娘に大学教育を受けさせ，社会に進出させるべきだ」と語っている．

18）次女の家庭の収入は，次女が管理している．タクシー運転手である夫は，毎月の収入を妻に渡しており，次女は収入の状況に応じて支出をコントロールしている．学歴や収入が夫より高い次女は，婚家での地位が高く，話す権利を持っている．

19）三女は，自分自身がムスリムだと思っており，豚肉を食べないなど，飲食の面においてイスラームの規定をきちんと守っている．イスラームの年中行事も盛大に過ごし，しかも結婚相手の選択においてもムスリム男性と結婚すべきだと思っているので，ムスリムとしてのアイデンティティを持っていると言える．

20）2008年10月初旬に三女とメールで連絡を取り，S氏一家の近況について調べた．S氏一家には特に変わったことはなく，S氏の妻と長男の妻は相変わらず，家の中で家事や育児等をする生活を送っている．S氏と長男は商売地の果洛蔵族自治州と家族のいる臨夏市の間で往復する．三女は大学院入学試験を受けたが，合格できず，現在も臨夏中学で教鞭を執っている．好きなムスリム男性に出会えなかったため，いまだ結婚していない．

21）S氏の家庭における女性の主婦化について，長男の妻は男尊女卑，「男は外，女は内」という封建思想（つまり家父長制）の影響と自分自身の無知識によると言っていたが，中国では知識がないにも関わらず社会に出て働いている女性（特に農村部からの出稼ぎの女性）が多いことから，筆者はS氏の家庭における女性の主婦化は主に家父長制によると思う．

22）「女性の社会進出」とは，一般には女性が家

庭を出て企業や官庁等に勤めるなど，外で働くことを指す．しかし，長男の妻の期待する社会進出とは，上述のような職業を持つという意味も含むが，それより外部社会と自由に接触するという意味を多分に含む．長男の妻は専業主婦で，毎日家の中におり，外部社会との接触がほとんどない．専業主婦である彼女が社会労働に参加することは不可能であり，彼女は外部社会に自由に出入りできることを望んでいるのである．

23）1949 年に社会主義政権を樹立した中国政府は，臨時憲法に相当する「共同綱領」の中で，「中華人民共和国は女性を束縛していた封建制度を排除し，政治的，経済的，文化教育的，社会的生活の各方面において，女性は男性と平等の権利を有する」と宣言した．ここで，男女平等という法的な地位が明確に確定された．新しい国家建設のため，「男女平等の理念」に基づいて，政府は過去において社会労働に従事してこなかった就業可能な女性を労働力として組織した．また，1951 年に『中華人民共和国労働保護条例』，1953 年に『中華人民共和国全国人民代表大会及地方各級代表大会選挙法』，1954 年に『中華人民共和国憲法』（1975・1978・1982・1988・1993・1999・2004 年に修正），1992 年に『中華人民共和国婦女権益保障法』が発布され，女性の社会における政治的権利，労働権益，基本的人権などについて詳細に定められた．

24）清真女校とは，ムスリム女性を対象として，彼女たちにイスラーム知識や文化知識などを教える教育機関である．清真女校における教育は初等教育と中等専門教育の二つに分けられるが，大多数の清真女校では初等教育，つまり基本的な宗教知識と文化知識の普及を目標とし，少数の清真女校だけが中等専門教育つまり中学校以上の学歴の人を対象に将来女校で教師となれるような人材を育成することを目標とする．

25）イスラーム的フェミニストという概念は，西欧の学者によって使われるようになり，「イスラーム主義と女性の権利の拡大や女性の社会進出は両立しうる」という立場の活動家（中西 1996:24）を指す．すなわち，イスラーム的フェミニストは，「女性の美的存在としての存在価値から女性を開放するためにヴェールを着用し」「男女間の生理学的，心理的差異を受け入れ」「女性の教育を重んじ」「イスラム法と女性の社会進出は両立する」と考える（中西 1996：24）．イスラーム的フェミニストの中で代表的人物は，モロッコ出身の女性クルアーン学者のファティマ・メルニッシである．彼女は初期にはイスラームのテクストに内在する家父長的な論理を暴露しようとしたが，今では宗教テクストのなかに新しい意味を求め，イスラームにおけるジェンダー関係にあまり家父長的でない新しい光を当てようとしている（山岸（訳）2004：38）．

参考文献

王建新．2003.「広東回族のイスラム文字文化と寺院教育」町田和彦・黒岩高・菅原純共編『中国におけるアラビア文字文化の諸相』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所：139–156.

王建新＆新免康．2005.「中国ムスリムの女性教育― 1980 年代以後の状況を中心に」加藤博編『イスラームの性と文化』東京大学出版会：127 – 151.

片岡一忠．1978.「光緒二十一・二十二年の甘粛の回民反乱について- 上-」『大阪教育大学紀要 社会科学・生活科学』27：53–77.

韓雪梅．2003.「中国少数民族「回族」の生成に関する歴史的考察」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』4：23–53.

金仙玉．2006.「清真女学の回族社会における役割と回族女性へ影響―甘粛省蘭州市を事例として―」『ククロス』第 3 号：53–68.

金仙玉．2006.「清真女学におけるムスリム女子学生の社会進出に関する意識調査と要因分析―中国甘粛省臨夏中阿女校を事例として―」『国際開発研究フォーラム』第 32 号：55–73.

厳汝嫻．1986.『中国少数民族婚姻家庭』中国婦女出版社.

江波．1995.「臨夏穆斯林女学研究―対“女学”学員学習生活状況的文化考察」『甘粛民族研究』: 33–36.

江波＆王錫苓．1996.「穆斯林“女学”研究―再訪臨夏穆斯林女校的調査報告」『甘粛民族研究』2：82–87.

高明潔．2002.「中国人ムスリム＝回族のダブル・アイデンティティ―回族の成立とその現状」『文明 21』9：125–162.

虎有澤．1997.「礼県回族地域内婚調査発微」『回族研究』4：85–88.

佐野志津子．1988.「農村三世代家族における世

代間の認識の一致・不一致」『老年社会科学』19：42–59.
澤井充生．2002.「中国の宗教政策と回族の清真寺管理運営制度―寧夏回族自治区銀川市の事例から」『イスラーム世界』59：23–49.
秦均平．2004.「家庭経済与回族両性地位述論」『寧夏社会科学』6：53–58.
新保敦子．1996.「少数民族地域における女児未就学問題―寧夏回族自治区をめぐって」『中国研究月報』581・582：52–63.
水鏡君．1996.「浅談女学，女寺的興起与発展」『回族研究』1：51–59.
高橋健太郎．2000.「回族・漢族混住農村の社会構造と居住地の形態―寧夏回族自治区　納家戸村の事例」『地域学研究』13：65–95.
高橋健太郎．2005.「中国・回族の聖者廟参詣と地域社会―寧夏回族自治区の事例」『地理学評論』78（14）：987–999.
中華人民共和国国家統計局．2006.『中国統計年鑑　2006』中国統計出版社.
張承志．1993.『回教から見た中国』中公新書.
張承志．1994.「中華文明のなかのイスラーム―中国」片倉もとこ編『イスラーム教徒の社会と生活』栄光教育文化研究所：153–189.
陳其斌＆楊文炯．2005.「西寧市城東区回族教育発展現状的人類学調査与研究」『民族研究』6：29–36.
中田吉信．1971.『回回民族の諸問題』アジア経済研究所.
中田吉信．1985.「中華人民共和国の宗教政策―イスラム教界の対応を中心に」『レファレンス』2：4–31.
西澤治彦．2004.「民衆レベルからみた中国のイスラム―南京市の回族の調査から」『中国』19：56–67.
根笈美代子．1993.「嫁姑関係位置認知について両者の差異：福岡市と大分市の場合」『日本家政学会誌』44（9）：713–722.
敏文杰．2007.「儒家“五倫”思想和劉智“五典”思想之比較」『回族研究』1：32–36.
馬国柱＆虎有澤＆張玉玲．2004.「黄土高原上的民族家庭研究―以張家川回族家庭為例」『西北民族大学学報』5：152–156.
馬通．1986.『中国伊斯兰教派门宦溯源』寧夏人民出版社.
馬通．2000.『中国伊斯兰教派与门宦制度史略』寧夏人民出版社.
馬蘭．2001.『西部忠魂』銀河出版社.
松本ますみ．2000.「中国イスラーム新文化運動とナショナル・アイデンティティ」西村成雄編『ナショナリズム―歴史からの接近』東京大学出版会：99–125.
松本ますみ．2001.「中国西北におけるイスラーム復興と女子教育―臨夏中阿女学と韋州中阿女学を例として―」『敬和学園大学研究紀要』10：145–170.
目黒依子．1980.『女役割―性支配の分析―』垣内出版.
山中美由紀．2004.『変貌するアジアの家族：比較・文化・ジェンダー』昭和堂.
楊文炯．2002.「女学：経堂教育的拓展与文化伝承角色重心的位移―以蘭州，西安，臨夏調査為個案」『回族研究』：25–30.
羅彦蓮．2002.「同心県回族女童学校教育現状的文化与社会性別詮釈」『西北民族学院学報』第五期：116–120.
劉援朝．1994.「臨夏伊斯蘭教農村社区的社会組織――広河県庄禾集郷調査」『西北民族研究』1：117–130.
梁向明．2007.「略論回族伝統家庭倫理思想」『回族研究』1：37–44.
Gillette, M. 2000. Between Mecca and Beijing: Modernization and Concumption Among Urban Chinese Muslims. Stanfrod, Calif.: Stanford University Press.
Gladney, Dru C. 1991. Muslim Chinese: Ethnic Nationalism in the People's Republic. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
Gladney, Dru C. 1998. Ethnic identity in China: the making of a Muslim minority nationality. Fort Worth, TX: Harcourt Brace College Publishers.
Jaschok, Maria & Shui Jingjun. 2000. The History of Women's Mosques in Chinese Islam: A Mosque of their Own. Surrey. Richmond, Surrey: Curzon Press.
Pang Keng-Fong. 1992. The Dynamics of Gender, Ethnicity and State among the Austronesian-speaking Muslims(Hui-Ustat) of Hainan Island, People's Republic of China. Ann Arbor, Mich.: UMI Dissertation Services.
United Nations. 1994. Women in Asia and the pacific 1985–1993. New York: United Nation.

インターネット資料

臨夏回族自治州人民政府
http://www.lx.gansu.gov.cn/Article_Index.asp
（2008 年 6 月 30 日参照）